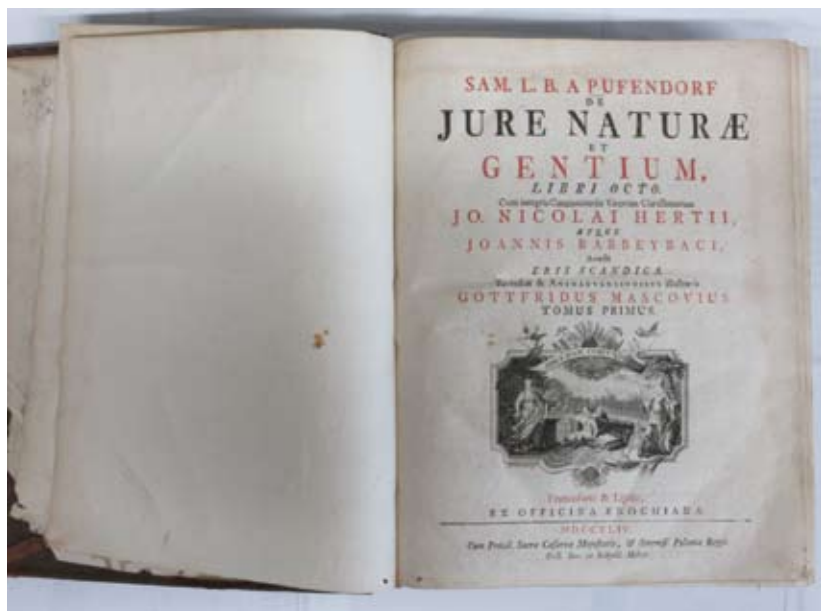


Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY
No.11 December 2017



ザミュエル・プーフェンドルフ著『自然法および万民法』
(フランクフルトおよびライプチヒで1744年に刊行。大川四郎研究室所蔵)

CONTENTS

<特集> 社会科学を原語で読む

・「系列」はKeiretsu?	経営学部	田中 英式	2~3
・アングロ・サクソン法を古期英語で読む	国際コミュニケーション学部	田本 健一	3~4
・私のドイツ語入門ーマルクスとの出会いー	経済学部	竹内 晴夫	4~5
・初心	国際コミュニケーション学部	飯島 幸子	5~6
・フランス語と社会学・精神分析	文学部	櫻村 愛子	7~8
・初めての中国書	現代中国学部	松岡 正子	8~9
・社会科学をタイ語で読む?	国際コミュニケーション学部	加納 寛	10~11
・史料と対話して三十余年	法学部	大川 四郎	11~12

<エッセイ>

・D. H. ロレンスへの深い畏敬と激しい憧憬の40年間	経営学部	山田 晶子	13~14
・Adventures in Hospital (A month as a guest of the NHS)	法学部	ジョン・ハミルトン	15~19

<その他>

・第5回公開講演会開催報告			20
---------------	--	--	----

<事務局より>

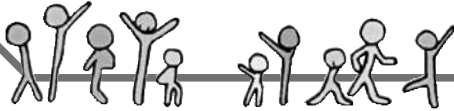
・Language Café in Toyohashi			23
-----------------------------	--	--	----

2017年度外国語検定試験奨励金のご案内・編集後記			24
---------------------------	--	--	----



社会科学を原語で読む

「系列」は Keiretsu ?



経営学部 田中 英式

経営学は、もともとアメリカで生まれ、その後アメリカを中心に発展してきた学問です。したがって、皆さんが経営学部で勉強する理論や概念のほとんどはアメリカの文献に依っています。しかしながら、アメリカ中心の経営学において、日本が大きな影響力を持った時期がありました。トヨタ自動車をはじめとする日本の製造業企業の国際競争力に大きな注目が集まり、1990年代のアメリカではいわゆる日本型生産システムに関する研究が盛んに行われました。

有名な文献として、Womak, Jones, & Roos [1990]、Liker, Fruin, & Adler [1999]、Dyer [2000] などがあります。こうした日本企業についての経営学の文献を原著で読んでみて面白いことは、例えば、tsunami や kimono などと同様に日本語の単語がそのままローマ字表記で使われる場合が結構あるということです。トヨタ自動車を中心に日本のサプライヤー関係の優位性を検証しているDyer [2000] を取りあげてみましょう。例えば、日本独自の企業間関係を意味する「系列」という言葉は、以下のように使われています。

I also examine how Chrysler adapted and modified the keiretsu model to work in the United States. (Keiretsu is a Japanese word used to refer to a group of Japanese companies that collaborate in partnership fashion.)

あるいは、「出向」という言葉については次のように使われています。

The practice of interfirm employee transfer (shukko) in Japan is now well known. Some previous studies suggest that important reasons for shukko include helping large assemblers maintain control of suppliers and the opportunity to shed unwanted employees.

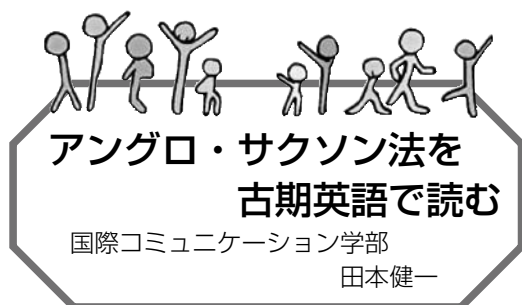
「系列」も「出向」も日本のビジネスでは一般的な言葉ですが、これらの言葉にうまく合致する訳語が英語にはありません。したがって、Keiretsu、Shukko とそのまま日本語の単語が文中に使われています。その他、生産現場での改善活動も Kaizen、トヨタ生産方式で有名なかんばん方式も Kanban と日本語の単語がそのまま使われています。

また、この本では Toyota や Honda、Nissan といった大手自動車メーカーに加え、Aishin Seiki や Kojima Press など皆さんの先輩達も就職している地元愛知県の自動車サプライヤーのケースも多く出てきて親近感を覚えます。

このように、日本企業を研究対象とした経営学の文献を原著で読んでみるといろいろと面白い発見があります。もっとも最近はあまり海外の文献に日本企業が取り上げられることも少なくなりましたが。

引用文献

- Dyer, J.H. [2000]. *Collaborative Advantage: Winning Through Extended Enterprise Supplier Networks*. Oxford University Press
- Liker, J.K., W.M. Fruin, & P.S. Adler [1999]. *Remade in America*. Oxford University Press.
- Womack, J.P., D.T. Jones, & D. Roos [1990]. *The Machine That Change the World*. Harper Perennial.



5世紀から9世紀ごろまでの英国は、七王国時代 (the Heptarchy) と呼ばれていました。ケント (Kent)、サセックス (Sussex)、ウェセックス (Wessex)、エセックス (Essex)、イースト・アングリア (East Anglia)、マーシャ (Mercia)、ノーサンブリア (Northumbria) というアングロ・サクソン人の七つの王国が成立していたのです。その時代の国王が発布した法律文書は、アングロ・サクソン語つまり古期英語で書かれたものもあれば、12～14世紀にラテン語に翻訳されて写本として現存しているものもあります。他に、11世紀、12世紀の国王によって発布され、写本として残っているものもあります。それらすべてを体系化して編纂したものが『アングロ・サクソン人の法律』(Liebermann, Felix, *Die Gesetze der Angelsachsen*: Halle a. S.: Max Niemeyer, 1903-1916) です。

最古のアングロ・サクソン法はケント王国のエゼルベルヒト (Æthelberht: Kent王589-616) によって601年から604年に亘って発布されました。キリスト教に改宗後に法律を発布したものと思われる。90条からなる法令ですが、数例のみ紹介し、解説を試みます。第1条には、Godes feoh 7 ciricean XII gylde. Biscopes feoh XI gylde. Preostes feoh IX gylde. Diacones feoh VI

gylde. Cleroces feoh III gylde. Ciricfriþ II gylde. Mæthl friþ II gylde (神及び教会の所有物の窃盗は12倍の賠償に相当する。司教の所有物の場合は11倍。司祭の場合は9倍。助祭の場合は6倍。聖職者の場合は3倍。教会や集会所の平和を乱す場合は2倍の賠償に相当する) とあります。キリスト教に改宗してから発布された法律であるだけに、教会への配慮が真っ先に示されています。当時の社会情勢が伝わってきます。

第10条には、Gif man wið cyninges mægdenman geligeþ, L scillinga gebete (国王の乙女子と同衾をした場合は、50シリングズの賠償金を支払うべし) とあります。ここで問題となるのは、“cyninges mægdenman” と、“L scillinga” です。“L scillinga” の方から考えていきましょう。第8条には、Cyninges mundbyrd L scillinga (国王の保護に相当する代価は50シリングズとする) とあります。このことから、第10条で述べられている“国王の乙女子と同衾をした場合に支払うものとされている50シリングズの賠償金”は、“国王の保護を犯したことに相当する代価50シリングズ”ということであると考えられます。次に、“cyninges mægdenman” のことです。“mægdenman” という語は、“mægden” と“man” からなる複合語で、“mægdenである人”と考えればよいと思います。“mægden”は、今の英語の“maiden”に発達する語ですが、古期英語では“少女”、“処女”、“女中”といった語義で使われていました。それが“man”と結合して“mægdenman”となり、“女中”と“処女”を意味するようになったのです。第7条では、“国王に仕える鍛冶屋とか使者を殺害した場合は、通常の贖罪金 (wergeld) を支払うべし”、と書かれていますが、その金額は100シリングズということになります (第21条)。これは殺人罪を犯したことに対する贖罪金のことですので、同衾の場合とは別に考えなければいけないところですが、国王の保護を犯したことに相当する代価として通常の贖罪金の半額というかなりの高額が定められていることに注目しておくべきでしょう。第11条では国王の粉挽き女中との同衾の場合は、25シリングズを、第14条では、貴族の女中と同衾した場合は、12シリングズを、

そして第16条では、庶民の女中と同衾した場合は、6シリングズの賠償金を支払うべし、と定められています。以上のことを総合的に考慮して、第10条で述べられている国王の乙女子は、国王に仕えている女中ということであって、処女性を問うものではないと言えるでしょう。

最後に、法律を意味する今の英語のlawという単語は、アングロ・サクソン人から受け継いだものではないということを述べておきます。古期英語末期に、ヴァイキングがもたらした語で、デンマーク語起源のlagu [ラグ] という語に由来するのです。古期英語で法律を意味する語はæ [エー] でした。それはまた、“結婚”をも意味していました。その辺のことは別な機会に。

私のドイツ語入門 —マルクスとの出会い—

経済学部 竹内晴夫



「(論文を) 原語で読む」というのは、研究者の世界では当然のことであろう。既存の研究を踏まえた研究を行うためには、日本の書物だけを対象とするわけにはいかないし、そもそも日本の学問は西洋の学問の上に築かれてきたからである。もちろん近年は、いち早く外書にアクセスする場合は別として、よい翻訳があれば必ずしも原語で読む必要はないかもしれないが、主たる研究対象の文献資料は原語で目を通しておきたいものである。私の場合は、経済理論が

研究対象なので、大学院時代には、テキストとして、アダム・スミス『諸国民の富』やD.リカード『経済学及び課税の原理』、そして『資本論』を原語で読むことが要求された。

ただ、わたしは大学まで読書らしい読書をしたことがなかったため、原書を読むどころではなかった。正直に言うと、大学時代はほとんど教室に顔をださなかったのも、日々のエクササイズが大事な語学はからきしだめだった。そのため、大学院に入るための語学も、その後大学院生として原書を読む段になっても、独学で取り組むこととなった。もちろん教室で学んだからといって、それだけでは原書に歯が立たないかもしれないが、それにしても、基礎は教師に教わったほうがよい。まことに「先達はあらまほしきこと」である。そういう点で、これから「社会科学を原語で読む」人に対して、あまり参考にならないとは思いますが、語学の基礎がない人間が原書を読むようになる事例としてみてもらえればと思う。

幼少期からずっとボールばかりを追って日々を過ごしていただけに（今ではその面影はないと人は言うが）、職業として大学教師になるとは思いもよらなかった（Hazard!）。だから最初は、本を読むこと自体眠くなったり頭が痛くなったりしていた。ただ、大学に入って刺激を受け、友人とともに読書会で、マルクスやレーニンなどの著作を読んだ。その中で、マルクスの『経済学・哲学草稿』Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844にとっても感銘を受け、もっと勉強がしたいと思った。

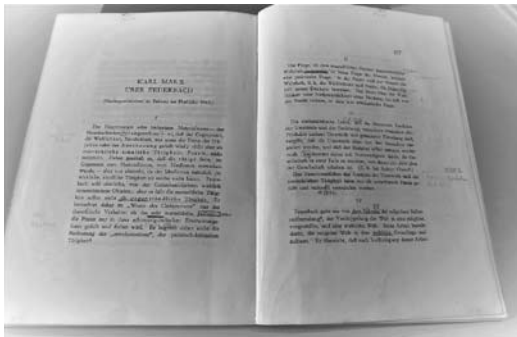
大学3年次のゼミの先生は、西洋経済史が専門だったので、マックス・ヴェーバーや大塚久雄の著作を読んでいたが、半年程過ぎて、先生と議論しているうちに、宇野弘蔵の著作（『経済政策論』『恐慌論』『経済原論』）をゼミのテキストとして読むことになった。歴史の先生のゆえか、とりわけ原典を丁寧に読む（一字一句逃さないような）読み方であったが、とにかくここで精読のしかたを学んだ。卒業論文は、初期マルクスと絡めて『資本論』の労働過程論について書いたのだが、もう少し自分の頭で『資本論』を読みたいと思った。後先のことは考え



ず(経済的援助なく)、大学院に進むことにした。

『資本論』はドイツ語で書かれているので、それを読むにはドイツ語ができないとお話にならないが、それまでドイツ語を学んだことがなかった。そのため、独学で習得する以外になかったが、基礎を粘り強く勉強することにも耐えられなかった。そこで、ロクに文法も勉強せずに読みたい本にアタックした。

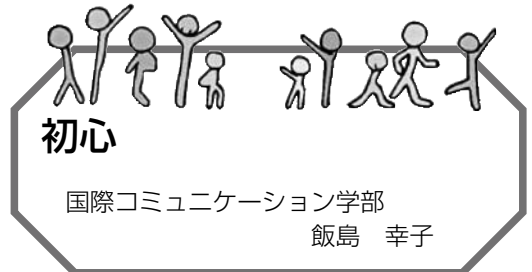
しかし、Das Kapital『資本論』に取り組んでみたものの、1日かかっても10行くらいしか進まなかった。それで、短文の「フォイエルバッハへのテーゼ」Marx über Feuerbachを繰り返し読んだ。これは若きマルクスがフォイエルバッハへの批判を認めたメモだが、後の経済学批判につながる観点がみられておもしろい。その11番目のテーゼは、今でも、フンボルト大学(ベルリン)の入り口に入ってすぐの場所に刻まれている。



Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert, es kommt aber darauf an, sie zu verändern.「哲学者はこれまで世界をさまざまに解釈してきた。しかし大事なことは世界を変革することである」。

大学院に入ってからは、若いドイツ語の先生と仲良くなり、ヴェーバーの『職業としての学問』(Wissenschaft als Beruf)を朗読してもらい、その録音テープを聞きながら暗唱するように読んだ。この本は学者の心得を説いた講演録だが、著者の価値判断排除の考え方(学問と政治の区別)が出ていて興味深い。これでドイツ語に慣れてきた。文法はそこそこ勉強して、すぐに読みたい本に進むというやり方もまんざらでもない。というか、私のような怠け者にはそれ以外の道はなかったのであるが。

こうして、Das Kapitalを読むこととなった。大学院の授業の中で、自分の研究対象に関わる箇所は原書を繰り返し読んだ。ただし今度は、原書を読んでもうのみにするのでなく(しっかりした解釈は大事!)、批判的に読むことが大事だということを教わった。このときの師匠には、律儀に読むだけではだめで不遜に読めといわれた。あれからずいぶん時間がたったが、不遜に読めているだろうか。オリジナルな問題提起ができていであろうか。まだダメだしされそうである。今年、『資本論』初版の刊行(1867年)から150年目にあたるが、あらためて現代社会分析の視点から原点(原典)に立ち戻って理論に取り組みたい。



私が社会科学分野の文献を初めて原語で読んだのは、修士論文の執筆を進める中でのことだった。私は修士課程より「ドイツ統一」に関わる新テーマ——卒業論文とはまったく異なるテーマに取り組み始めた。ドイツ統一前後の社会運動スローガンの中で「Volk(フォルク)」というキーワードが重要な役割を果たした点、また、新聞記事への登場頻度がこの期間に急上昇したことを検証し、修士論文では、西ベルリンの日刊紙「ターゲスツァイトゥング(Die Tageszeitung: TAZ)」の記事を一次資料としてもちい、キーワード「フォルク」を含むタイトルの内容分析を行う計画を立てた。現代における「フォルク」という語は「民衆・民族・国民・人民」などを意味するドイツ語である。日本国内の先行研究では、ドイツ民族性を指す言葉として「フォルク」を無批判にもちいる記述をしばしば目にしたものの、しかしながら「フォルク」概念そのものについて語られた研究はごくわずかであった。そこで、私が参照したのが、

オットー・ブルナー他編『歴史的基本概念: ドイツにおける政治社会的言語に関する歴史事典』¹というドイツ語文献だった。その第7巻に収録された「folk」の項目には、かなりの分量で語の背景が時系列的に詳述されており、ここで得た情報に基づき、「folk」という概念・用語はその内容自体、歴史的にさまざまな変化を経てきたものであることを明示できた。こうして「folk」の歴史的可変性を論証できたことで、統一前後に頻出した「folk」に関わる言説に対し、現代の統合ドイツ社会におけるパラメータとしての有効性を問うことが可能となった。この論点は修士論文の核心となった。

修士課程から新たに「ドイツ統一」に関わるテーマに携わり始める一大決心をしたとはいえ、ドイツの新聞記事（もちろんドイツ語）を分析資料としてもちいたり、キーワード「folk」の概念背景を求めて原書（ドイツ語の文献）にあたったりすることが決して容易だったわけではない。今から振り返ると、当時の私のドイツ語能力的には、ずいぶんと背伸びした挑戦であったように思う。すでに学部の4年間で、かなり集中してとれる限りのドイツ語関係の授業を履修してきた経緯があり（1～2年次に週6コマずつ、3～4年次に週2コマずつ）、当初、ドイツ語については、できることはやってきたという自信のようなものがあつた。しかし、修士課程に進んで最初の夏と春に初めて短期で行ったドイツの語学講習会では、読む・書くはともかく、話す・聞くについてはずいぶんと要鍛錬であることを痛感したりもした。それでも、あえて修士論文の中で原語の資料をもちいたり、原典を参照したりと、いわば茨の道を

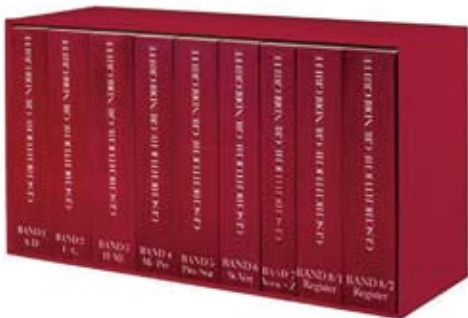
選んだのは、結局のところ、ドイツ語をつかって何かを新たに知っていく作業が好きだったということなのだろうと思う。待ち受ける苦難以上に、「知りたい」気持ちが勝ったわけである。

ドイツ語の基礎文法を学ぶ時分から、意識して辞書をできるだけたくさん引くようにしていた。調べたい語の意味をただ見つけるだけでなく、できるだけその語がもつ別の意味や使い方（凡例）、熟語なども見るようにしたし、引いた基本語の前後の並びに目をやって派生語を確認するなどもしていた。自習（予習）で長文を読解するとき、後には研究の一環でドイツ語の文章読解に取り組むときなど、身につけた文法知識に沿って文の構造を分析し、意味を追うのは、ある種のパズルを解いているような楽しさを感じるものが往々にしてあつた。たとえば、文中の気になるフレーズから見当を付けたキーワードを辞書で引き、そこで目当てのイディオムを見つけ出し、文章全体の意味がすっと通ったときなどは、思わずにんまりしてしまった。そうこうする内に1冊目の辞書はぼろぼろになり、修士課程へ進学する際には2代目の辞書を新調した²。

何とかかたちになった修士論文を後にし、博士課程ではドイツ留学を経てさらに新たなテーマを見つけ、ドイツ語は私の中でますます重要なコミュニケーション・ツールの位置づけになった。これから原書に挑戦する人に一言贈るならば、何より「知りたい」という強い動機をもつこと、そして辞書とうまく付き合う習慣を身につけられれば、社会科学を原語で読むハードルはぐっと低くなるはずである。

¹ Brunner, Otto, Werner Conze & Reinhart Koselleck (Hg.), 1992, *Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*, Klett-Cotta: Stuttgart

² この当時、ドイツ語は新正書法への移行期間にあたり、学部時代に使用していた旧正書法による辞書はその後、新正書法への対応版が出ないまま廃版になってしまった。そのため、やがて新正書法に対応する辞書を購入したのをきっかけに、複数の辞書を使用するようになっていった。





フランス語と社会学・精神分析

文学部 櫻村 愛子

「社会科学を原語で読む」というテーマについて、私の場合は、専門は社会学と精神分析（精神分析は人文科学だが）であり、言語としてはフランス語である。

社会学はフランスで生まれ、今も社会学領域をリードしている。また、精神分析については、創始者でウィーン生まれのフロイトはドイツ語で著作を書いているが、「フロイトに帰れ」のスローガンのもと、現代で最も影響力を持つ精神分析学派は、ラカンを生み出したフランスで活動している。

そんなわけで、フランス語は自分の学問分野とは、切っても切れない関係を持っている。また、社会科学とフランス語の関係について言えば、アメリカンスタンダードとしてのグローバリゼーションに最も理論的なカウンターを構築しているのはフランスである。人文的な哲学や文学の伝統に根ざして、人間の豊かさを本質的に思考し、グローバリゼーションをデフォルトとする英米圏の思想には決定的な否定を突きつけている。

さすが革命の国だと思う。その人間中心主義について言えば、それは生活やコミュニケーションのしかたに根づいている。フランスでは生活はエスティックであり、ラテン的であり、生活を楽しむことを惜しまない。人と向き合うことを大事にする。常に世の流行りが幅を利かす日本と異なり、古典をじっくり読む。書店の社会学の棚にもデュルケムやジンメルやウェーバー、ゴフマンの著作集がゾロリと並ぶ。カル

チュラルスタディーズのようなある種ヒステリー的な批判的学問は、ほとんど見たことはなかった。

フランス社会の定点観察の中では、南仏でもCPE（le contrat première embauche、「初期雇用契約」。若者の雇用条件改悪）反対運動のデモに出くわしたり、街の中央広場のオキュパイに出くわした。2007年に『ネオリベラリズムの精神分析』（光文社）という新書を書き、当時ではまだ日本に十分紹介されてなかった、precarité（プレカリテ、不安定さ）をめぐる状況を紹介できたのも、この現場を知っていたからだと思う。

日本で、英語や日本語でこれらの著作を読んでいたなら、きっと伝わらない臨場感がそこにはあった。フランスで書店に行けば、社会学者の著書の隣には、当時、次々自殺で社員が亡くなった、フランステレコム（仏最大手の国有の通信会社が2004年に民営化し、大規模なリストラや成果主義を導入、遠方に左遷されるなどして、職場で飛び降り自殺などが相次いだ）のルポルタージュが並んでいた。

社会学者だけに限らないが、フランスでは、インテリは、ルモンドLe Monde（新聞）やフランスキョルチュールFrance Culture（ラジオ）などで、時のアクチュアルなテーマについて発言する。また、街中の小さな本屋の一角に著者と読者が集まって、激しい議論をする。学問が今と切り結んでいる現場をこうやって何度も目撃した。映画や美術の批評のレベルも高い。ニュース番組の最後は新しく封切られる映画や演劇、美術展のニュースだし、それは生活の一部になっている（日本でも、昔の深夜番組『11PM』や筑紫哲也の番組では、文化を紹介していたのに、今はほとんど見ない）。

よく言われることだが、どうして翻訳書はあんなに読みにくいのだろうか。原語で読むことには、文学ではなく社会科学であっても、文章

のリズムについて読む快樂がある。

もちろんフランス語の文章教育はあまりにリジッドで、「序、本体、まとめ」のような構造を持っていない文章は、たとえ中身が独創的に書けていても零点であり、日本の綴り方教育の伝統をもつ情緒的作文教育とは全く反極である。社会科学における絶対的ともいえる論理性の由来は、このような教育に存するだろう。なので、学位論文を本にしたようなものほど、目次だけでもつまらない感があるのだが、それを基礎にした上で、人文・社会学者たちの書く文章は、やはり美しい。社会科学でも、感情がほとばしり、小説を読んでいるような興奮を覚える。それも、上記のような、生活のスタイルとどこかでつながっている気がする。それは、フランス映画のように、ある種ドメスティックでもあるといえる。英語のようなポピュラリティのある言語では、ドメスティックな感情を共有する読者共同体に向けた、このような文体は出てこないように思われる。

そして意外に、社会科学でも、概念のイメージやコンテキストは重要だと思う。現代のフランスを代表する社会学者ブルデューの理論に「le champ」という概念がある。日本語では「界」と訳していて、悪くはない訳語だけれど、「le champ」は、フランスで日常的に使われている「畑」という意味の語だから、日本語の「界」という仰々しい言葉だと、ニュアンスは少し変わってくる。

最後に、2013年の在外研究では、私はフランス語で精神分析を受けていた。まさにフランス語の言葉がとても大きな意味を持っていた。私の中では、日本語を翻訳して話していたところもあったけれど、一年くらいしていると、フランス語で思考しているところもあった。本当の意味での概念というか言葉との出会いはそこにあったと思う。翻訳をする時、原書を読む時、常にこの経験は生きている。



初学者の多くが、中国語を学び始めて3～4年経った頃、そろそろ教科書ではなく、中国社会で普通に読まれている雑誌や新聞、専門書などを読みたいと思うようになります。中国語の授業では1年目に文法の基礎や簡単な会話を学び、2年目には少し長めの文章で故事来歴や現代事情などを読み、日常会話も少しできるようになって、さて次は、という頃です。実は、この時の「次は」というハードルはかなり高く、なかなか超えられないというのが実態です。

私も、中国書を楽々と読む自分を夢見て、チャレンジしました。まず、短くて簡単と勧められたのが童話です。けれど、知らない漢字が結構出てきて、動物名や植物名も次々登場し、思った以上に難解で、全く楽しめませんでした。次は、新聞です。毎日音読すると発音もよくなり、社会事情にも通じて一石二鳥だといわれました。けれど、初めてみる言葉がやけに多くて音読どころではなく、教科書の語彙との差を思いしらされ、とても歯が立ちません。その次は原書（翻訳書の原本）です。中国版『源氏物語』の『紅樓夢』を選びました。これは好みにあい、わからなくなったら翻訳をみながら読んだので楽しかったのですが、とにかく長く、くたびれて途中で放棄。チャレンジはことごとく失敗しました。

大学院に入ってようやく面白い本に出会いました。イザベラ・バード『中国輿地紀行1、2』[平凡社東洋文庫2002(1899)]で、金坂清則の日本語翻訳本です。バードは大英帝国の女性旅行家(1831-1904)で、女性初の王立地理学協会特別会員、22歳から69歳までの40数年間アメ

リカ、オーストラリア、インド、イラク、日本、朝鮮、中国、ロシア等世界の各地を訪れ、貴重な写真と優れた旅行記を残しています。『中国奥地紀行』には、65歳を超えて挑んだチベット高原東端の灌渠—理番庁—雑谷脳—梭磨のルートが記されています。そこは4000メートル級の山々をいだく高山峡谷地帯で、「蛮子」とよばれる非漢族集団が居住する「無法地帯」（清朝の法律が通じない土地）です。旅行記には賞賛と悪態の両極の言葉が満ちていますが、未踏の地を突き進むバードのしぶとさが圧巻です。

1989年6月4日、北京で天安門事件がおきた時、私は四川大学に留学していました。成都でも学生のデモが毎日続き、メディアは異様でした。突然、テレビの解説がほぼ聞きとれるようになりました。甲骨文字に生贄として記された「羌」に興味をもっていた私は、『羌族史』の著者である李紹明先生に師事していました。たくさん歩いて、たくさん見るようにというのが李先生のご指導でした。バードが通った同じルートも、高山病で頭痛と吐き気にげっそりしながら歩きました。バードの事実の描写はとても正

確で、彼女が見た150年余り前の状況がほとんど変わらずに残っており、驚きました。

当時、四川大学の歴史系史料室には19世紀後半から20世紀半ば（中華人民共和国成立以前）までの報告資料がほとんど未整理のまま山積みされており、自由に閲読することができました。貴重な調査報告の数々が掲載された『華西邊疆研究學會雜誌』（華西協合大学同学会編）全巻や川西各県の概況が記された「川康邊政資料輯要」等もそろっており、まさに華西邊疆研究の宝庫でした。ようやく、楽しく中国書を読めるようになりました。

莊学本（1937）『羌戎考察記』（『羌戎考察記—撮影大師莊学本20世紀30年代的西部探訪』[四川民族出版社2007再版]）はおすすめの書です。たくさんの写真を載せた旅行記で、写真が語る情報量に圧倒されます。莊学本（1909-1984）は、上海生まれの写真家。中国東北部が日本軍に占領され、西部地区に活路を見出そうとしていた中華民国政府と世論を背景に、雑誌『良友』等の特約記者として中国西部の民族地区をまわり、大量の貴重な写真と記録を残しました。25歳の若者が母国の未来を憂えながらとらえた中国西部は、バードにはない視点です。『莊学本全集（全二冊）』[中華書局2009年]は、彼が歩いた西部各地の写真をほぼすべてカバーしており、その情熱と執念がわかります。

バードと莊学本から学んだことは、「その時」の写真記録をたくさんとること。彼らが歩いた中国西部の民族地区を、私も1980年代後半から20数年間かけてまわりました。拙著『青藏高原東部のチャン族とチベット族 2008汶川地震後の再建と開発』（論文篇・写真篇）[あるむ2017]は、私の研究のひと区切りです。1865年のバードから1939年の莊学本まで約75年、莊学本から松岡まで約75年の時が経過しています。この3書を順にながめると、中国西部のチベット高原東端にくらす非漢族集団、チベット族やチャン族の150年間がみえてきます。



社会科学をタイ語で読む？

国際コミュニケーション学部
加納 寛



日本は、高校・大学レベルの教育はもちろん、大学院レベルの教育まで基本的に母国語でできる恵まれた国です。

たとえばフィリピンの本屋さんで教科書コーナーを覗いてみると、それが社会であろうと数学であろうと、多くの教科書が英語で書かれているのに気づきます。そりゃ英語できるようになるわ… シンガポールに行ったときに覗いた陸軍博物館では、マニュアルが展示されていましたが、当然に英語で書かれていました。一般の兵隊さんまで英語で技術を習得しちゃう（英語が読めないと、訓練についていけない）ということですね。うーむ、なんか、ノータンキに日本語で勉強しててすみませんと言いたくなるけど、日本語で高いレベルまで勉強できるのは、日本が植民地になったことがないことに加え、日本が学術的に高いレベルにある証拠です。

では、日本と同じく植民地にされたことがないタイではどうでしょう？ タイの教科書も、基本的にはタイ語が使われています。ただし、大学あたりになると英語の文献や教科書を使う率も次第に増えていき、大学院では、少なくとも理論的な部分についてはほとんど英語の文献を使うことになっていきます。この背景としては、タイの大学の先生方は、ご専門がタイ史であろうとタイ政治であろうと、欧米（とくにアメリカ）等の大学院で博士号を取得した方が多く、自分が経験した授業環境を踏襲すると、自然に英語文献をエベレストのように積み上げて宿題にする授業になることや、理論的枠組みについては欧米のものを使用していることなどが挙げられます。

そんな理由で、少なくとも自分がタイの大学院に留学していた頃は、史資料やタイに関する

研究・文献を除いてしまうと、タイ語ではなく英語で書かれた社会科学の理論書を読んだ（というか、強制的に「読ませられた」）辛い思い出ばかりが走馬灯のように駆け巡ります（夢でうなされます）。

タイの大学では、授業で示された文献（地獄のような量を読まないで、授業にはついていけない… めっちゃ辛い… 愛大の宿題はかなり抑制されているので、タイに限らず正規に留学する人は、号泣しながらの宿題遂行を覚悟しないとイケません!!）は、基本的に各自が図書館に行き、該当部分をコピー（ถ่ายเอกสาร）するのがお約束。タイの図書館では、コピーは自分でとることはできません。日本でいうと国会図書館みたいなシステムで（行ったことがない人は、早目に行っておきましょう！ 加納ゼミではゼミ合宿の目的地の一つになってます）、図書館内にあるコピー屋さんのところに行ってコピーの注文をします。注文時に、何分後（注文した枚数によっては何日後）に取りに来たらよいかを聞いておくのがコツ。1枚0.5バーツ（2円弱）なので、惜しみなくポンポン注文するのが吉。図書館によって、コピー屋のシステムが少し違うので、自分の作業に適した図書館を見つけておくのがツウです。私は留学先大学の政治学部図書館によく行ってました。授業で文献を読む宿題が出る度に大量のコピーに行くの



タイで製本した文献コピー：
表紙や製本の方法は選べます

で、コピー屋のおねえさんともすぐに顔馴染みになります。

コピー屋さんはプロなので、我々シロートとはコピーの方法が違ってます(コピー機自体は、愛大のコピー機の方が高機能)。プロは、まず何枚コピーするかをざっと計算し、その枚数をコピー機の「コピー枚数」に登録してから(同じページを何枚もコピーする際に使用することを想定した機能)、おもむろにスタート・ボタンを押し、すごい高速で(モチ手動ね)ページをめくりつつ、オニのような勢いでコピーします。コピー機の使い方としては間違ってる気が、そこはかたなくしますね。

結果、古い本だとボロボロになって、さっきまで本の一部だった紙きれがコピー機周辺に雪のように積もっていくという、日本の図書館でやったら270年くらい入館禁止になりそうな情景が、今日も繰り返されていきます(涙)。なお、コピーを依頼した側が必ずしておかなければならないのは、できあがりをよく確認することです。ページが飛んでないかどうか(コピー屋さんは裏向けたままでページをめくっていくので、ページは普通に飛びます)、ページが折れ曲がったままコピーされていないか(折れ曲がったところは読めないから!)、コピー中に勢いがつきすぎて本がずれたために文字が判読不能になっていないか、といったところは確実に確認しないとダメです。留学中なら、多少の不具合があっても、もう一回図書館に行って不具合の部分だけコピーしなおせばいいけど、卒論とかを書くために数日~数週間しか滞在しないような場合は、帰国してそーゆー箇所を見つけた段階で、下手をすると卒業が1年延びたりする可能性も… 怖いですねえ…

コピーが無事に終わったら、図書館の外のコピー屋さんに行って製本(ゼツバン)してもらうこともお忘れなく。製本の仕方とか、表紙とかは選ぶことができます。とってもキレイに製本してくれるので、日本語文献の製本もお願いしてみたら、綴じる向きが逆だった(うぬー、読みにくい!)のは苦い思い出です。

そっから読む作業に入るのですが、その際は、事典を手元に置くのが必須。小説を読むわけじゃないから、「辞典」を使うと失敗します。専門用語の正確な定義がわかる分野ごとの「事典」を引くことが絶対に必要です。英語の文献を読む場合は、英語で編集された事典(あるいは英語で引ける事典)だけでもいいけど、タイ語の文献を読む場合は、それらとともにタイ語で編集された事典も当然必要になります。かくして机の上は、エベレストのごとき宿題の文献の山に並んで、事典や参考図書類が開きっぱなしになり、さらにウツカリ変圧器をかませわすれたパソコンから轟音とともに煙が立ち上り(危険!)、びっくりしてびっくり返った飲みかけの牛乳がコピーの山に襲い掛かり(さらに危険!)、「カオスってのはこーゆーことなのねー(呆然)」という状態に。

ということで(?)、是非、皆さんも留学し、外国語の本をビシバシ(叩かれながら)読んでいただきたい(自分が受けた苦しみを他者にも味あわせたい)と思う今日この頃でした。



社会科学書を読むと、その文章が書かれた時代環境にひたることできる。更に、その著者の使った原語で読むならば、彼(女)の思考過程を実地に追体験することができる。以上の点を特に実感するのが、日本語の翻訳がない場合である。

学生時代、フランス語とロシア語を同時履修した。ロシア語は、E・H・カーの『一国社会主義』を読む際に利用した。同書を読みながら、引用されている『ソ連邦共産党決議集(КПСС в резолюциях и решениях)』、『経済

問題に関する党・政府決議集（Решения партии и правительства по хозяйственным вопросам）等を実際に参照した。一連の諸決議において、勇壮な文言は、却って、革命政権が内外の諸課題で苦境に陥っていることを伝えていた。些細な点であるが、党決議集の扉ページ上部余白に小さく印刷されている編集元が、第3巻（1954年）までは「ソ連邦共産党中央委員会附属マルクス－エンゲルス－レーニン－スターリン研究所（Институт Маркса－Энгельса－Ленина－Сталина при ЦК КПСС）」となっているのに対し、第4巻（1960年）では「ソ連邦共産党中央委員会附属マルクス主義－レーニン主義研究所（Институт Марксизма－Ленинизма при ЦК КПСС）」と変更されていた。エンゲルスと共にスターリンの名が削除されている。1960年のはかのスターリン批判の翌年である。これは、原書ならではの歴史追体験であろう。その後、私はソビエト・ロシア史の専門家とはならなかったが、この経験をもとに、専門書を読む際には、可能な限り原史料と対照するようにしている。

大学院では、西洋法制史専攻で、フランス民法典の学説史に関わる研究をした。対象としたのは、「フランス民法典の父」と称される18世紀フランス人法律家ロベール・ジョゼフ・ポティエの全集（19世紀刊行）の一部である。フランス語の知識が大いに役立った。彼の主要業績とされる債権論の中で、ポティエは、先輩法学者らの諸説を縦横無尽に引用し、総合している。しかし、彼なりの理由付けが物足りなかった。「ポチエ_マは『（先輩）デュムウラン_マがへたなラテン語で以前に述べたことを、しばしば立派なフランス語で語ったにすぎない』（括弧内は引用者。アンベール著三井・菅野共訳『フランス法制史』、文庫クセジュ、白水社、1974年、p.94）との酷評さえある。デュムウランは、16世紀フランスの法学者である。その重要性は我国でも常々認識されていたが、「へたなラテン語」で書かれているためか、本格的な研究者が出てこなかった。俄然、デュムウランにまで学説の淵源を遡ってみたいとなった。

ところで、大学院入学後、文学部に通い、かの國原吉之助先生から、その御高著『新ラテン文法』（南江堂）で古典ラテン語を、次いで、田中美知太郎・松平千秋共著『ギリシア語入門（改訂版）』（岩波全書）を教科書にして、古典ギリシア語をも習った。更に、大学院文学研究科の西洋古典学演習にて、ホラティウス『詩論（Ars poetica）』、プラトン『饗宴（συμπόσιον）』、『ファイドロス（φαιδρος）』の講読にも参加した。

文学部演習室から法学部研究室に戻ると、デュムウランのラテン語テキストに一人取組んだ。プラトンのギリシア語で頻出するように、古代ギリシア人らは、定冠詞を二重に重ねて韻律効果を狙った。言わば、ドイツ語の冠飾句表現に韻律効果を込めるのと同じである。16世紀はフランス・ルネッサンスの最盛期である。こうしてみると、デュムウランの「へたなラテン語」とは、人文主義の影響で、古代ギリシア人らに倣い、古典ギリシア語の語順でラテン語論文を書いていたためだとわかった。この点さえわかると、デュムウランのテキストの論旨は極めて明確であり、著者の強烈な個性までもが直に伝わってきた。このデュムウラン研究は、現在も継続中である（愛大通信誌vol.209, p.16）。

スイス留学を契機に、最近では、ジュネーヴ条約（赤十字運動の原点）への関心から、日本、スイスのアーカイヴに所蔵されている英語、フランス語、ドイツ語あるいはイタリア語の史料を翻刻し、相互に対照させ、第二次世界大戦中に横浜に置かれていた赤十字国際委員会駐日代表部の活動をも研究している。敗戦直後にいち早く広島入りし、尾道でフリードリッヒ・ビルフィンガー代表は粗末な藁半紙にタイプ打ちした書簡を在横浜駐日代表部事務所に宛てて出している。そこには、“Something should be done and quickly”と印字されている。ぎこちない英文である。だが、ビルフィンガー氏の抱いた切迫感をひしひしと伝えている。

今後も、私と史料との対話が続くことだろう。

D. H. ロレンスへの深い畏敬と 激しい憧憬の40年間

経営学部 山田 晶子

イギリス20世紀の偉大な小説家・詩人であるロレンス（1885—1930）との出会いは大学院の博士（後期）課程に進んでからであったが、それ以降現在までのおよそ40年の間、彼への学問上の関心・興味は尽きることなく継続しており、退職後も彼を研究してゆくつもりである。

最初にロレンスの研究発表をしたのは、日本英文学会中部地方支部大会であり、取り上げた作品は『恋する女たち』であったが、これは彼の代表作であると同時に大学院生の私を読みこなすには難易度が相当に高い作品であった。しかし、ロレンスを面白く読んだのはこの長編小説が最初であったので、大胆にも研究発表の対象作品に選んだのであった。修士課程の時はワーズワースの研究をしており、日本英文学会中部支部大会では、ワーズワースをテーマとして1回研究発表をしたことがあったが、2回目のロレンスの発表の時にも非常に緊張をしたことを覚えている。この時に今は亡きロレンス研究の大家が私の研究発表を誉めてくださったので、少しホッとした。またロレンスが登場人物の心理を、たとえ相手が女性であっても詳細に分析して、適切に真理を突いた詩的な表現をしていることに感銘を受け、また私が好きなギリシア・ローマ神話への言及が多かったり、比喩表現が面白かったり等の数々の理由があることも、今日までロレンスの作品の魅力に執り付かれている理由として挙げられる。そして彼の作品には瞠目すべきオリジナリティが存在して

いる。

【Darkness（闇あるいは黒い世界）と二元論】

では、彼の芸術のオリジナリティとは何なのか。彼の思想は、第1作の『白孔雀』からものすごく衝撃的に出ていると言える。それは文明や中・上流階級への激しい批判と言えるもので、アナブルという労働者階級の森番は、人間は害虫だ、と罵り、ジョージという素朴な自然的若い農夫は、恋人レティに振られて最後はアルコール中毒になって敗残者となる。レティは中流階級の金持ちのレズリーを結婚相手に選んだのであった。アナブルももともとは教育のある男性であったが、貴婦人であった美貌の女性に幻滅して森番に落ちぶれたのであった。このように、金持ち階級と支配者階級への批判がロレンスの作品には一貫して存在する。

闇というのはキリスト教世界では克服すべきものであり、光こそが善であって、闇は悪として捉えられてきた。ロレンスが生まれた時代は19世紀の後半であり、イギリスではヴィクトリア女王統治の大英帝国の力がなおも強力な時代であった。彼が亡くなったのは第一次世界大戦後であり、戦争の悲惨さを身をもって体験していた。科学が進歩し機械文明が拡大していった結果、自然破壊が進み、拝金主義の世の中となり、「家族」、「愛」、「幸福」などの意味合いが分からなくなってしまったのであった。機械文明世界とは合理の世界であるが、このように

自然科学真っ盛りの時代において、ロレンスは「非合理」、「矛盾」、「本能」つまり「闇」の重要性を問いかけたのであった。それを「dark」、「darkness」、「instinct」、「intuitive」、「strange」、「magic」という言葉で表現している。ダークな主人公は男性として登場しているが、代表的な人物としてメラーズ（『チャタレー卿夫人の恋人』）、バーキン（『恋する女たち』）、ポール（『息子と恋人』）、チッチョ（『アルヴァイナの墮落』）、リリー（『アーロンの杖』）、ドン・シプリアーノとドン・ラモン（『羽鱗の蛇』）、アナブル（『白孔雀』）、ロメロ（『女王様』）、ジプシーの男（『処女とジプシー』）、ヘンリー（『狐』）等々がいる。

ロレンスは明るい世界（論理の世界）と暗い世界（本能の世界）の均衡を重視しているのであり、明るい世界を否定しているのではない。ただ、現代世界があまりにも論理を重視するあまり、本能の世界を否定しようとしていることの危険さを指摘しているのである。彼が生きていた時代にキリスト教が唱道していた光だけが重要であるとする精神主義の思想を批判し、そのため、「蛇」が象徴する「本能」を重視した。これは多様性の世界を重視することであり、いろいろなものが均衡を保って存在することを善しとした。「闇」を「善なるもの」と考えたのであった。

ゆえに男女関係にもこの均衡の考え方を取り入れている。これは、また、特異な思想であった。ロレンスの男女観は「星の均衡」(star-equilibrium) という表現を取っている。ロレンスの生きていた時代においては、男性は社会で働き女性は家庭で子供を育て夫に尽くすという

考え方が中心であった。イギリスで部分的に女性が参政権を持つことができたのは1918年であり、完全な女性参政権は1928年に勝ち取られた。ロレンスが生きた時代は、まさに女性参政権運動が大波のように押し寄せていた時代であった。彼は、女性参政権運動には、ある時は賛成し、ある時には反対するような意見を述べている。しかし、彼が結婚した女性は強い女性の代名詞であるようなフリーダというドイツ人で、中流階級の女性（出自は上流階級）であった。また、彼が付き合った多くの女性たちは教養があり知性がある強い女性たちであった。ロレンスは、家庭に閉じこもって夫や子供たちの世話をするという古いタイプの女性たちではなくて、社会で活躍する女性たちに惹かれたのであった。

ゆえに、彼が女性に対して差別意識を持っていたという研究者たちも中にはいるが、彼らの批判は当たっていないであろう。彼は人間一人ひとりがその独自性を大切に、他者と群れ交わることなく、自分が自分であるがゆえんを守ることを説いた。それはシングルネス(singleness) と呼ばれる思想で、これもロレンスのユニークな思想である。シングルネスとは、つまり、「孤立」するという意味ではなくて、また断片的な人間になるのではなくて、「完全さ」を維持することなのである。

私のロレンス研究はまだまだ果てがない。彼の世界は広く深くて謎に満ち満ちているからである。ロレンスに出会えたことは我が生涯における最高の喜びの一つである。



Adventures in Hospital (A month as a guest of the NHS)

by a grateful John Hamilton

(Key words:

NHS National Health Service 国民保健サービス制度

ECG Electrocardiogram 心電図

A&E. Accident and Emergency 救急処置室

Anaesthetic. 麻酔 Angiogram 血管造影図

Artery 動脈 Vein 静脈

Heart Attack 心筋梗塞/心臓の発作)

In April I was all ready to come back to Japan....my bags were packed.....that weekend we were opening our garden for charity.....daffodils were in flower and cherry was in blossom (In England the best Japanese cherry is TAIHAKU 太白several friends had come to help including Angus 先生On the Sunday morning I went with another friend to buy croissants and pains au chocolat in the COOP....I felt a bit dizzy in the shop....and again while driving back.....so at home I went to lie down....a mild ache in the back of my jaw and in the arms...it had happened before....usually I lie down for a few minutes and then I'm fine....but this time unfortunately/ fortunately there were witnesses. Though quite undramatic, it looked like a "heart attack" so my wife rang 999, and within ten minutes an ambulance had arrived and I was being given an ECG (Electrocardiogram) and then being rushed into hospital, to my SURPRISE.. It was as though I was being kidnapped. I spent the morning in the A&E (Accident and Emergency)

of St Richard's Hospital in Chichester and then I was moved up to the Emergency Ward where I remember the conversation, presided over by the very well informed chief bedmaker, was about North Korea and Syria.....I spent Monday there asleep on a cocktail of pills....aspirin, blood thinners and paracetamol....being monitored all the time. On Tuesday I was again in an ambulance with paramedics being transported to Worthing Hospital about half-an-hour away. Here I was given an ANGIOGRAM under local anaesthetic. They pump a purple liquid into the heart and take X-Ray photographs of the arteries. In the Angiogram Unit there was a Greek doctor, and a receptionist called Binny from Kerala in India, and nurses from Kerry in Ireland, and Canada, and Zimbabwe. They all wore lead plates to protect themselves from the



Game of Chess with the Canon

X- Rays. After this an Indian doctor, a girl from Shepherds Bush, came to tell me that two of my arteries were completely blocked, and that a third was partly blocked and they could not just put in STENTS there and then.....I would have to have BYPASS SURGERY. I asked an English doctor if I would ever be able to climb Mount Fuji 富士山 again and he said that there was a good chance, but not for a while. With that I was ambulated back to the Acute Cardiac Unit in St Richard's Hospital in Chichester. I couldn't escape.

I was there in Chichester for three weeks as an in-patient waiting in a queue for an operation in Southampton Hospital. I came under the responsibility of a Dr Wong and his team of trainee doctors, one English, one from Sudan, one from Iran, one from Pakistan. Other patients in the Acute Cardiac Unit were Igor, a Russian from Latvia.....In 1978 Igor had been a famous ice hockey goalkeeper in the Soviet Union.....These days Russians in Latvia find it hard to get jobs, so he had come to live in Bognor Regis and had been working delivering reconditioned mattresses from the north of England to the south. This is very hard work because you have to carry the mattresses upstairs to people's bedrooms.....which is probably why he had landed up with me in the Acute Cardiac Unit. And another 'inmate' was a Canon of Canterbury Cathedral, Peter Coles aged 89. His daughter came in to visit him bringing with her a chess set.....I

had a game with him and he won. So the next day we had another game, but this time his heart had a blip....and I won. He was rushed out on a trolley....But he soon came back and the next day we played again. He won again. He was much better than me. His daughter and her husband had had a farm in Rhodesia. They had had the farm next door to my great uncle Humphrey Gibbs who at that time was Governor of Rhodesia. 'Hum and Molly' had given them chickens as a wedding present. It is a small world indeed !.....Also in the Acute Cardiac Unit in the bed next to mine was Malcolm. He was visited every day by all his family including his Spanish father-in-law called Nesto from Mallorca. Malcolm's son Tobias aged 14 helped me a lot by sorting out the storage on my iPad. One of the good things about my hospital stay and convalescence afterwards was that I had WIFI throughout, so I was not lonely at all and could communicate freely with Japan and other far away places. And as a guest of the NHS (National Health Service) I was sharing a room with others. That is also nice. I must mention another remarkable arrival in the Acute Cardiac Unit. That was Ashikul Hoque, a distinguished looking man originally from Sylhet in the northern Bangladesh. He arrived with three ladies in black, fully veiled. It was quite dramatic. They looked like his three wives, but actually I think they were his wife and his sister, and and his daughter who we talked to later. He told us he had come from Sylhet to Karachi, and had been a bus conductor in London

and a steel worker in Sheffield and that these days he had restaurants in Aldwich south of Chichester...

I can't mention all the nurses and bringers of tea and sweepers of the floor because there were many. The English nurses were wonderful. Rebecca I clearly remember. And there was a Russian girl Elena, born in Vladivostok...her father had been in the Soviet navy and had been killed.....she was brought up in Kaliningrad. She was married to a Parsee and lived somewhere south of Chichester. They had been to Bombay to visit his relatives.....And there was a girl from Gujarat who spoke Hebrew. She spotted my Teach Yourself Hebrew on the end of the bed. She had worked for a Jewish family in Golders Green and had followed them to a kibbutz in Israel.....I wanted to write a letter to my daughter-in-law in Tel Aviv in Hebrew.....so I wrote it in English and she translated it into Romanised Hebrew.....and I photographed it with my iPad and sent it off. And it was understood and appreciated at the other end. There were also wonderful nurses from Poland (Joanna) and from Bulgaria (Radke and Mariya) also Zimbabwe (she spoke English like Steve Biko in the film *Cry Freedom*).....

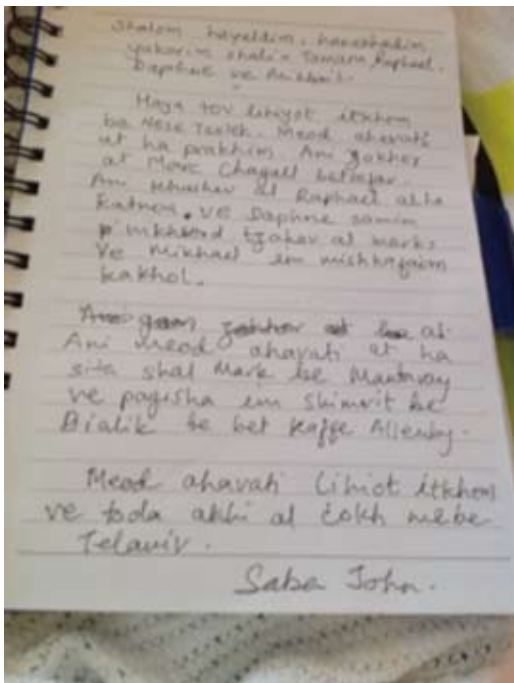
It was like being on holiday. To remember it all is like remembering a dream. I had thought Chichester where I live was an English city, but actually in St Richard's Hospital there were people from all over the world. From these encounters I

learned that England at grassroots has changed a lot recently. So what was the British contribution in St Richard's Hospital ? Half the people there were British. I think that their contribution comes under three headings: dedication, imagination and sense of humour. I did notice that people like the ward sisters and the nurses in charge of rooms were really committed. And imagination is necessary because money is always short. And sense of humour is necessary, because sometimes things that happen in hospital are just too serious. I wonder if the British contribution to the European Union has been the same.....dedication.....imagination...sense of humour.....I think I would add political balancing...

At half-an-hour's notice I was whisked off again in an ambulance to Southampton Hospital. This hospital is like a huge battleship along the side of Southampton water. My operation was to be the next day. Before the operation I met a patient who was just about to go home. He had come in to have an operation on his knee. Under anaesthetic he had had a heart attack, so they had given him a bypass operation as well. Five days later, he was being sent home. I also met Ferdinand from the Illocas in the Philippines. His mother had named him after Ferdinand Marcos. She was a loyalist, he said. His job was to make sure I had a shower before the operation. And I met the anaesthetist, a Dr Mozon al Nabulsi from Amman, originally from Nablus in Palestine, though actually it was his colleague

Linda who took his place in the operation. He was a very good person. And I met the surgeon who must have read about me because he said that one day he wanted to visit Japan. Actually there were at least two surgeons because I met them afterwards. Maybe I will have a chance to welcome him! (What a job it must be to be a heart surgeon!!!!)

The operation took five hours. I didn't know much about it. They made a deep cut in my leg from ankle to groin and took out a vein. The scar remains though it is gradually fading. Then they chainsawed my chest (sternum, thorax) and opened up the rib cage, and bypassed the blocked arteries with the vein from my leg, in my case a quadruple bypass.....and then they sewed me up. Again the scar remains.



Letter in Hebrew (romanised script) from Saba John

Afterwards I was placed in the CDHU (Cardiac High Dependency Unit) with several others who had had different operations, some of whom were in considerable pain. It was almost as if one of them was being tortured. On the night shift there, there were two tall male nurses, one Italian and one an African I think from Nigeria to help me to get up from the bed. And there were two nurses from Mauritius. During the second night I had a dream and found myself on the floor all tangled up in the monitor wires which I was pulling off. Some of the wires were 'drains' which went down through my ribs which I couldn't pull off. I woke up to find the nurses from Mauritius pinning me down and disentangling me and reconnecting me to the ECG pads. Later in my stay the nurse in charge of this ward pulled out the drains with pliers. They were long pieces of wire which seemed to go right down into my heart. (I learned from Dr Ishihara in Okazaki that these wires could have been connected to a pacemaker. But in the event, they weren't needed.) On the fourth night I was taken by Ferdinand and another of his friends from Manila on a rattling trolley to a ward at the far end of the hospital. I know a little bit about the Philippines because I have read the Rosales novels by Sionil Jose (Frankie Josewho is still alive and has a bookshop in Manila.) So Ferdinand and friend seemed to accept me as one of their own. "When are you next in Manila?" they asked. It was like being looked after by the Mafia in Southampton. They

were reassuring to be with. Finally I was discharged. This took a long time. It was a Bank Holiday Weekend and many of the doctors were on holiday. Late afternoon a tall handsome Indian, possibly the head of the hospital, came to our ward and with great care gave two of us our discharge papers, and I was sent home in an ambulance. The whole month had cost nothing and it had been an adventure on my doorstep. And I was alive.....Later an American told me that if I had had the same treatment in America and if the insurance had been paying for it, it would have cost half a million dollars. But for me it was free and I do not think I could have been looked after better.

As I said, throughout my time in hospital I was in touch with the world. I remember watching the Grand National twice on television. Memorable indeed was the victory of 'One for Arthur' from Kinross. And I saw Lewis Hamilton win the Shanghai Grand Prix. And over coffee we heard Theresa May's surprise announcement after breakfast that there would be a General Election. And during the election, Suzuki Norio 先生 of Aidai now at Cambridge, supplied me everyday on Facebook with the speeches of Jeremy Corbin...which I enjoyed so much. Jeremy Corbin was brought up in a manor house (used sometimes for Bed & Breakfast)he was sent to a prep school.....later he did VSO in Jamaica.....and in due course he became Labour MP for Islington. All

this was somehow familiar to me as I lay in bed in hospital and then convalesced at home. As it turned out the General Election was about him. There was no other politician as good. I am a Conservative, so I didn't vote for him. But I wish he could be the leader of the Conservative Party (which of course is impossible, though sometimes the impossible happens). Many people felt as I did as was shown by the result. I voted Conservative, hoping for a U-turn on Brexit.....which has yet to happen (September 19th, 2017). Thank you Suzuki Norio 先生。 Later, during my convalescence at home. I was given 'THE OPTICIAN OF LAMPEDUSA by Emma Jane Kirby. This is a short book about migrants coming over from Africa to Italy/ most actually drowning on the way. This book was given to me by a neighbour called Daphne Birch, who I call the conscience of our neighbourhood. The people wanting to get into the European Union from Africa is one of the great issues of our time.



Baoding Iron Balls, a present to me in hospital from Angus Macindoe

愛知大学語学教育研究室 第5回公開講演会 開催報告

多文化共生の為の 外国語教育とは



講演会の日は生憎の雨で、前年度まで実施してきた名古屋校舎よりは、かなり都心から離れた豊橋で実施するため、内心は、参加者数についてかなり心配していた。あまりにも少なかつたらせっかく東京から来て下さる鳥飼先生にも失礼になる、どうしよう、と。が、全くの杞憂だった。先生の講演会には、遠路はるばる来校頂いた方や、私のFBでお知らせしたこともあり多くの知人・友人の先生も駆けつけて下さった。前年度に劣らず約120名の方が参加して下さいたことを、まず心から感謝したいと思う。

今回のテーマは、「多文化共生の為の外国語教育とは」である。鳥飼先生はまず、政府が唱えるグローバル人材とグローバル市民の違いについて話され、英語のスキルを育成するだけではグローバルな社会で生きていく人材とは言えないとし、グローバル市民の要件として、1) 異文化理解 = 異質性に対して寛容 (tolerance)、

2017年10月14日(土) 15:00~17:00
愛知大学 豊橋校舎 6号館 610教室
講師: 立教大学名誉教授 鳥飼 玖美子氏

2) 他者との関係構築 = コミュニケーション能力、3) 自ら考える力 = 批判的思考が必要と述べられた。そしてグローバル化の進展に伴い、実はグローバリゼーションの逆流、つまり各国や各地域が孤立化しつつある事例にも触れ、本当に多文化の人々と共生はできるのか、多様な文化がぶつかる際の軋轢は簡単に克服できるものではないことを、改めて感じた。

そして多文化共生社会を目指すには、「異文化コミュニケーション能力」が必要だが、先生は、日本で言うところの「コミュニケーション能力」は近年、英語力に収れんしつつある懸念を述べられた。欧州評議会の言語政策では、多様な言語と文化を豊かな遺産とし保護され発展させるべきものとし、その多様性を相互理解へと転換させるのは教育である、と述べている。そして複言語主義(母語+2言語)・複文化主義を推奨する。最近、日本の文科省も唱えるようになった、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)も、本来は複言語主義を具現化するために策定されたのだ。しかし、なぜか日本では、その内のA1~C2までの6段階の言語熟達度のみがクローズアップされており、これが各学校にも、本来は評価の尺度であるCAN-DO記述文を到達目標として導入、という誤った流れにつながっていった。日本では、本来の理念は残念ながら具現化されていないのである。

欧州評議会でも重んじられている理念は、「相互理解」や「自律性」である。そして前者には、英語力というスキルではなく、「異文化能力」(intercultural competence)の育成が必要なのだ。但し、この評価は難しいため、CEFRにおいても現在検討中であり近い内に出るであろう、ということであった。そしてこの異文化能力育成には、多面的思考を養う必要がある。多面的思考も自律性も、育成するには、2つの指導法が今後有力になると考えられる。一つがCLIL(内容言語統合型学習)であり、もう一つが協同学習である。4Cを鳥飼先生は6C(communication, content, cognition, community, culture, context)のCLILと考え、協同学習によって、他者と対話し、学び合いの関係性を築き、自律性を身につける、それが多文化共生時代に必要な資質を育成するだろう、ということであった。

以上が、先生のお話の要約であるが、私ももちろんだが、多くの聴衆が先生のお話には同意できたという意見が、質問コーナーや懇親会でも出ていた。私自身、地域政策学部で教えているが、グローバル化は、日本国外での現象だけでなく、国内でも私たちの住む地域社会で進んでいる事象である。在日外国人・外国人労働者も、そして最近、政府の施策により一挙に増えている外国人観光客もその多くがアジア系であり、国内の外国人との共生を考えるのであれば、英語教育ではなくむしろ最も必要なのは中国語である(安達、2017)。その次が、韓国語やポルトガル語で英語はその後に必要となる。実際、大学のある豊橋近郊の小学校には、アジア系や南米系の児童も多く在籍し、日本語指導が必要な外国人児童数は、愛知県が日本で最も多い。そのような状況で英語一辺倒の外国語教育を小

学校で推進して果たしてどの程度の効果があるのだろうか。そして、国外でも安達・酒井(2016)で示したように、愛知県の中小企業の海外事業の展開先は、ほとんどがアジア諸国であり英語圏ではない。講演の後の質問では、小学校の教育現場の大変さとそのような状況でいかに英語指導をするかについての課題や懸念が出たが、もっと現状を踏まえた外国語教育を展開すべきなのであろう。

その他の質問として外国語学習の動機づけをどう維持すれば良いかというものもあったが、やはり、日本のような日常生活で外国語に触れる機会がほとんどない国では、テストや就職のためなどの一時的な動機づけではなく、自律した学習者を目指すためにも、外国の言語・文化に関心をもち、外国の人々と関係性を持ちたい、という姿勢から生まれた動機づけが必要であろう。鳥飼先生も最後におっしゃっていたが、英語の免許を取得していない多くの小学校の先生が2020年から、教科としての英語を担当しなければならなくなる現状では、せいぜい「いかに英語嫌いをなくすか」のみを目標とするのが精いっぱいであろう。そして、そのような厳しい現実にも関わらず、外国語教育政策は、現場の声よりも政府主導で進められるという現状をより明確に認識し、暗澹たる気持ちになってしまった。しかし、少なくとも、多くの方々と日本の外国語教育における課題を共有できたこ



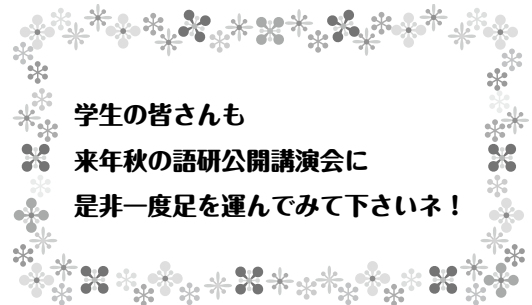
と、そしてその共通認識を新たな外国語教育の在り方を考えていくきっかけにしていこうと、と改めて心に刻んだ。

最後に、鳥飼先生を始め、ご来場いただいた先生、そして関係者の皆様、本当に有意義な会をありがとうございました。

安達理恵・酒井志延 (2016). 中小企業が求めるグローバル人材育成教育に関する事例調査—地方製造業を中心に JACET 問題教育研究会会誌『言語教師教育』第3巻1号, 121-132.

安達理恵(2017). グローバル化時代のコミュニケーション能力 小学校の外国語教育から考える「一貫教育における複言語能力養成のための人材育成・教材開発の研究」(代表者: 境一三) (招待講演), 慶応義塾大学日吉キャンパス

(文責: 安達 理恵)



語学教育研究室主催 公開講演会

第1回 2013年10月12日 (土) 14:00 ~ 16:00 名古屋校舎 L804教室

講師: 田邊祐司先生 (専修大学教授)

「なぜ、たなべゼミ生の英語力は驚異的に伸びるのか
——英語力をつけるためのあれや、これや——」

第2回 2014年10月25日 (土) 14:00 ~ 16:00 名古屋校舎 L804教室

講師: 廣森友人 (明治大学准教授)

「動機づけ研究は役立っているのか?—私なりの答えをいくつかの観点から—」

第3回 2015年10月31日 (土) 14:00 ~ 16:00 名古屋校舎 L803教室

講師: 小野隆啓先生 (京都外国語大学教授)

「二言語同時学習の可能性 A Possibility of Bi-language Simultaneous Learning」

第4回 2016年10月29日 (土) 13:00 ~ 15:00 名古屋校舎 L803教室

講師: 上野恵司先生 (共立女子大学名誉教授/ (一財) 日本中国語検定協会理事長)

「中国語とはどんな言語か—中国語の学び方、活かし方—」

～ Language Café in Toyohashi ～



豊橋校舎では、英語、フランス語、中国語のネイティブ教員との交流の場として Language Café を開催しています。外国語のコミュニケーション能力を自然に向上させるだけでなく、異文化についての理解を深めることができます。(開催日時は下表参照) また、学部学年を超えた交流ができ、視野が広がること間違いなしです。

各 Café の教員からもメッセージが届いています。この Café へぜひ参加してください。

【English Café】

Hello and welcome to the Language Café! My name is Simon, and I am often in the café at lunchtime talking to students about anything that we are interested in. I'm from England, so I'm especially interested in football (or soccer). I'm really happy that the Japan team will be in the 2018 World Cup! I'm also looking forward to the 2019 Rugby World Cup which will be held in Japan. I'm not only interested in sports, I also enjoy travelling both in Japan and in other countries. Where is my favourite place in Japan? You'll have to come to the Language Café and ask me!

【Café Français】

Bonjour!! Soyez les bienvenus dans le Café Français tous les vendredis à 12.30 au Language Café de l'université. Venez parler français, demander des questions sur la vie en France et la culture française dans une ambiance plus détendue que les cours. Le staff du café et moi-même sommes là pour vous aider et vous accueillir. A très bientôt au café!!

【中文茶座】

你想用汉语和中国人交流吗?你学习汉语遇到什么问题了吗?那么来中文茶座吧。每周二午休时间的五十分分钟里,你可以一边吃饭喝茶,一边和中国老师聊天,请老师答疑解惑,在轻松愉快的气氛中提高你的汉语水平和交际能力。中文茶座,热情欢迎你的到来!

【開催日時】 通常授業日

言語	昼休み (12:40～13:10)	夕方 (16:40～)
English	月・火・水・金	月・水・金
中国語	火	—
Français	金	火



2017年度 外国語検定試験奨励金のご案内

言語	名古屋校舎		豊橋校舎	
	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定 (英検)	準1級以上	実用英語技能検定 (英検)	2級以上
	TOEIC	650点以上	TOEIC	530点以上
	TOEIC S/W	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定 (国連英検)	B級以上		
	ビジネス通訳検定 (TOBIS)	3級以上		
	日商ビジネス英語検定	3級以上		
	通訳案内士 (通訳ガイド)	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定 (独検)	4級以上	ドイツ語技能検定 (独検)	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定 (仏検)	4級以上	実用フランス語技能検定 (仏検)	4級以上
	DELFS・DALF	A1以上	DELFS・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
中国語	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	新HSK	3級以上	新HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力	2級以上	韓国語能力	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	3級以上		
日本語	日本語能力 (JLPT)	N1級	日本語能力 (JLPT)	N1級
	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上

☆中国語は現代中国学部を除きます

受付期間 名古屋校舎 2018年1月31日まで

豊橋校舎 2018年2月21日まで

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生 (協定留学生・大学院生・オープンカレッジ生等は除きます)



〈編集後記〉

浴びるほど大量の原語の文献を正確に出来るだけ速く読むことの大切さを、大学四年生であった1977年に文部省国際交流制度にてインドのネルー大学 (JNU) に casual student として留学した時に知らされました。インド政府の留学生として学んでいた他の日本人学生が term paper と呼ばれるレポートの作成に明け暮れる光景を間近に見たからです。本特集に寄稿された先生方の玉稿は一般の学生のみならず留学を志す学生にも裨益するところ大でしょう。また本号にて鳥飼先生のご講演の内容を披歴することが出来たことは望外の幸せです。高校生であったときラジオ「百万人の英語」の Kumiko Chatting Hour の放送を 'be all ears' のようにして聴いたことを思い出し、ご講演は感に堪えないものがありました。

(N.K.)